〔調査概報〕

昭和47年度加曽利南貝塚南側平坦部第4次遺跡限界確認調査概報

後藤和民
庄司　克

Ⅰ．調査の目的

加曽利貝塚の価値は、もはや、ただ単に、その貝層部の規模が日本最大であるとか、8字型の特異な形態を呈するとかいった皮相的な現象にあるのではない。また、加曽利E式・加曽利B式という土器型式が発見された標準遺跡であるとか、人骨の宝庫であるとか、世界的に有名であるなどといった把握も、さほど重要な問題ではない。早い話が、加曽利貝塚は単なる「馬蹄形集落」でさえなくなった。むしろ、縄文時代の早期から晩期にいたる集落の生成―発展―消滅の全過程を網羅した「集落の軌跡」を止めた遺跡であるところに、その本質的な価値がある。

従来、考古学界の常識では、馬蹄形あるいは環状を呈する大型貝塚においては、竪穴住居址や埋葬遺構などの集落遺構は、貝層分布範囲の内側にのみ分布するものと考えられていた。たとえば、破壊の危機に瀕した南貝塚の記録保存のための緊急調査さえ貝層部とその内側のみが対象とされたことからも、それは明らかである。ところが、その発掘調査の結果、北貝塚の内側にあるべき中期の住居址が南貝塚の貝層下から発見され、南貝塚の内側にあるべき後期の住居址が北貝塚の貝層の上部から発見された。この事実に対して、従来の認識を改めようとする動きはみられず、あくまでも「馬蹄形集落論」に固執する傾向が強かった。

しかし、昭和45・46年度における発掘調査の結果、南貝塚の南側平坦部および東側傾斜面において、縄文早期から後期にいたる各時期の住居址群、炉穴群、小竪穴群などが発見され、当時の集落そのものは、台地のほぼ全域にわたって広く展開していることが、さらに確認された。これによって、従来のように貝層の分布形態がすなわち集落形態を示すものであるとする「馬蹄形貝塚＝馬蹄形集落論」は否定され、日本最大の馬蹄形貝塚や環状貝塚でさえ、それはあくまでも集落の一部に含まれるべきものであることが、ここに立証されるに至ったのである。

このような新しい認識に基づいて、加曽利貝塚を集落遺跡として完全に保存・整備し、将来、野外博物館として十分に活用するには、そのための基礎的な調査を改めて行う必要がある。すなわち、住居址、埋葬遺構、小竪穴などの集落遺構の存在を把握し、それを現地に保存・定着するためには、まず、遺跡範囲の確認を早急に行わなければならないのである。

ところで一方、こうした学術的な必要性とは別に、あくまでも老人ホームの建設用地を加曽利南貝塚の南側または東側の隣接地に求めようとする意向があり、昭和45・46年度の発掘調査で集落遺構が確認された地区を避け、残る未調査地区を対象として、その予備発掘調査が要請された。そこで、その緊急調査を依頼された加曽利貝塚調査団では、あくまでも前述のような観点に立って、昭和45・46年度の調査に引続いて、第4次遺跡限界確認調査を行うことになったのである。とくに、さきの昭和45・46年度における予備調査は、南貝塚の南側平坦部と東側傾斜面との2地点に分散しておこなわれたが、本年度は南貝塚貝層部との接合地点に当る南貝塚南東の平坦部が対象となった。したがって、この調査によって、南貝塚の貝層部と、台地傾斜面との関連を捉え、集落展開の様相を明らかにする基礎的資料を確保することを目的とした。

なお、老人ホームの建設自体に対しては決して反対するものではないが、その建設用地としてこの南貝塚隣接地を選ぶ以上は、その該当地が集落の範囲内であってはならない。もし、その該当地が集落範囲内であることが確認された場合は、あくまでも、加曽利貝塚の貝層部とともに保存されることが必要となる。したがって、この調査は、記録保存のための全面発掘を目的とするものでは決してないことを断っておかねばならない。

II. 調 査 の 方 法

1. 調査の対象区域（第1図）

本年度の調査対象は、加曽利南貝塚の南側および東側に展開する平坦部および傾斜面のうち、南貝塚の貝層部と、昭和45・46年度で調査された南側平坦部との間の接合部に当るほぼ平坦な区域である。この地点の標高は31m前後で、東側の水田面との比高は13mをはかる。調査の対象区域は、千葉市桜木町154の4番地（17.509m²）のうちの約5,600m²である。

発掘調査区は、F—V区～VI区、G—III区～VI区、H—III区～VI区、I—III区～VI区、J—III区～VI区、K—V区～VI区。調査の便宜上、これらの各調査区を次の4つのトレンチに分けた。

Aトレンチ……H—III区～I—III区。

Bトレンチ……G—III区、H—III区　I—III区、J—III区。

Cトレンチ……F—V区、G—V区、H—V区、I—V区、J—V区、K—V区。

Dトレンチ……F—VI区、G—VI区、H—VI区、I—VI区、J—VI区、K—VI区。

2. 調査の期間

自　昭和47年7月1日

至　昭和48年3月31日

第1期　7月1日～7月31日、測量および調査区設定

第2期　8月1日～12月20日　発掘調査

第3期　1月15日～3月31日　埋め戻しおよび資料整理

3. 調査の担当者

イ、調査主体　千葉市教育委員会

ロ、調査受託者　加曽利貝塚調査団

団長　滝口　宏（早稲田大学教授）

ハ、調査主任　千葉市加曽利貝塚博物館学芸員　後藤和民

ニ、調 査 員　千葉市加曽利貝塚博物館事務員　薬師寺崇・庄司克・市川勇

明治大学考古学専攻生、郷田良一、飯塚博和、大竹良造ほか

立正大学考古学専攻生、上坂悟、増田修ほか

明治大学考古学研究会　上川哲哉、西村昭ほか

4. 調査の内容と方法

(1) 加曽利貝塚の周辺地形および調査区の測量

従来、調査のたびにその調査区や発見遺構や出土遺物の位置が図面に記録されても、その図面が毎回、現地と符合しない傾向があった。2度と再発掘のできない記録保存のための発掘調査ならば、それも問題にならないであろうが、発掘遺構などを現地に保存し、将来、再整備するためには、これでは意味がない。それらの位置を明確に現地に定着するために、全域を統合した経緯方眼のトラバースを組み、その基本杭を現地に半永久的に固定し、いつでも図面から遺構などの発見地点を現地に再現できるようにした。

そこで、加曽利南貝塚を中心に、北貝塚までの全域を含む区域を20m×20mの経緯方眼（東西・南北の方眼）によって囲み、その交点を経緯方眼トラバース（測量原点）として、まず全域の地形図を作成した。次に、そのトラバースそのものを区画の基準点として、20m×20mの発掘区を設定し、その西南端のトラバース原点を0とし、各発掘区にそれぞれ、西から東に向ってA・B・C…の呼称を与え、南から北に向ってI・II・III・……の名称を付して、たとえば、A—I区、A—II区、C—III区、C—V区などと座標呼びにすることにした。

(2) 作業の内容

第1期（昭和47年7月1日～7月31日）

まず、発掘調査の準備段階として、次のような作業を行った。

イ. 立木伐採・草刈作業　7月1日～7月20日

ロ. 測量・調査区杭打ち　7月1日～7月20日

ハ. 表土層発掘　7月20日～7月31日

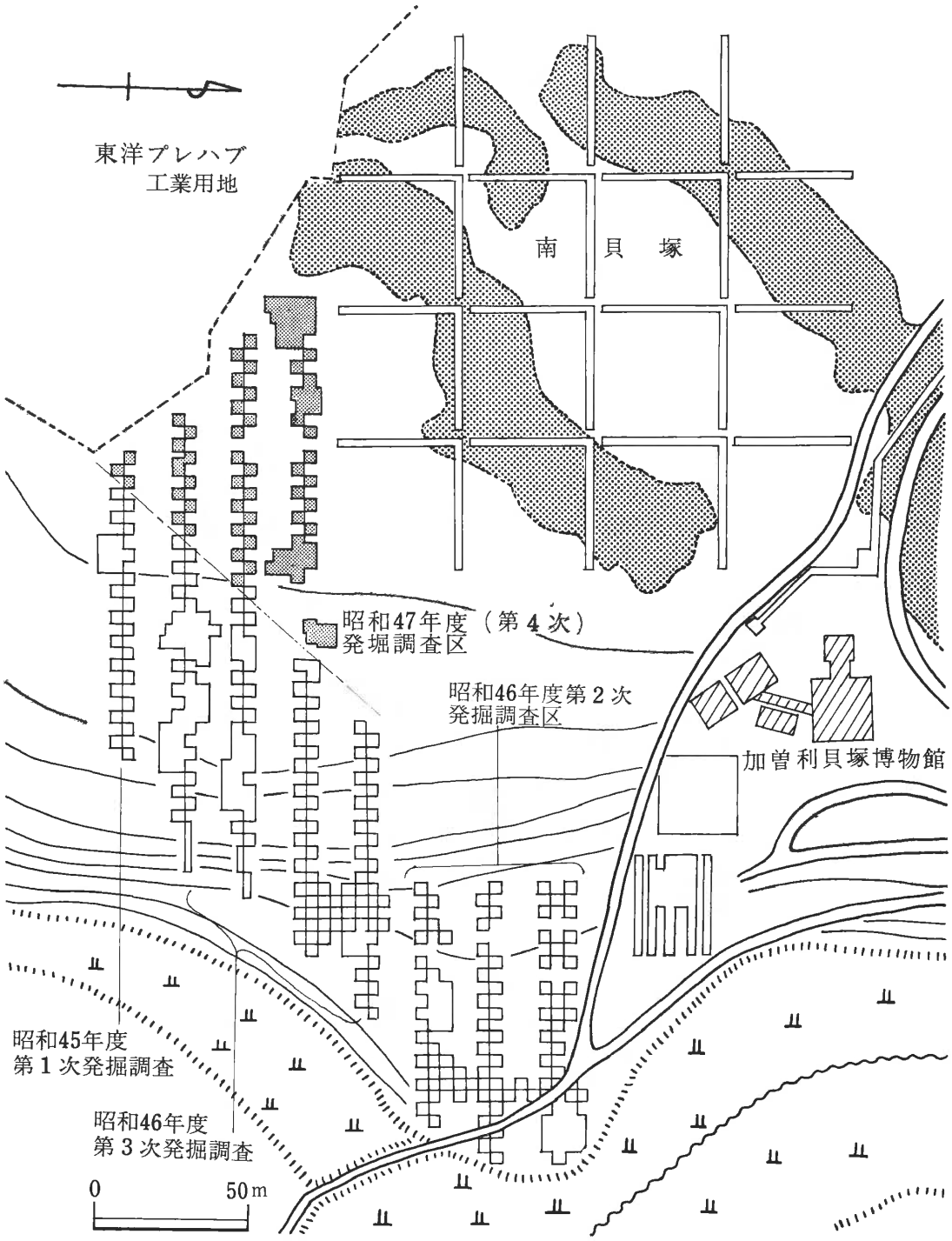
第2期（昭和47年8月1日～12月20日）

イ. トレンチ調査……20m×20mの調査区をさらに4m×4mのグリッドに区分し、そのグリッドを市松状に連結したトレンチを設定。その試掘によって、文化層の堆積状態と基盤地形の状態を全体的に把握し、遺構の所在を確認した。

ロ. 遺構のプラン露呈……発見された住居址や小竪穴などのプランの全体を把握するため、グリッドを拡張して、平面的に発掘した。

第3期（昭和48年1月16日～3月31日）

発掘地点の埋め戻し作業と資料整理を行った。



第1図　加曽利貝塚において遺跡限界確認調査のおこなわれた調査区概念図。

Ⅲ. 主な発見遺構

今回の発掘調査においては、縄文時代の竪穴住居址4基、貯蔵穴3基、土壙墓1基および用途不明のピット27口が発見された。このうち、後期の竪穴住居址を除くほかは、すべて中期に属する竪穴住居址と土壙墓および貯蔵穴で、用途不明のピットについては、目下伴出遺物の整理中であるが、その所属時期の最終的な判定がなされていない。またここでは、これらの遺構について逐一詳述するいとまがないので、その概要を第1表および第2表にまとめ、その中の主なものについて、ここに簡単に触れることにした。

1. 竪穴住居址

今回の調査区から発見された竪穴住居址は、その東端部から加曽利EⅡ式期のもの2基と加曽利EⅢ式期1基、それに西端部から堀之内Ⅰ式期のものが1基であった。それらはFⅥ～LⅥ区にいたる東西トレンチ内から発見され、その他の地点では小竪穴以外に住居址は検出されていない。これらの住居址に、昭和45・46年度に発見された住居址番号に続けて、その発見された順に J・D—16～J・D—19住居址と名付けた。また、直径1m前後から2～3mにおよぶ竪穴状遺構も、昭和45・46年度に続けてP—12～P—42小竪穴と呼ぶことにした。これは、あくまでも加曽利南貝塚の南側平坦部および東側傾斜面における遺跡限界確認調査の一連として、遺構分布の状況を総合的に把えるためである。

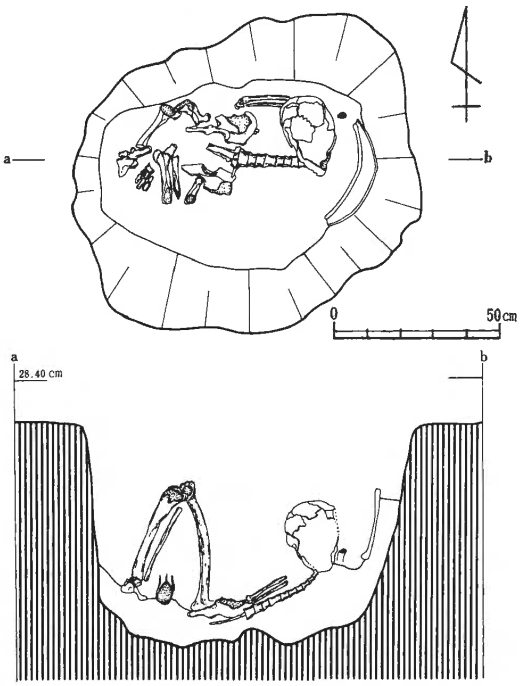
J・D—No.16住居址（第2・3・4・5図）

今回の調査区では東端に当るK—Ⅵ区とL—Ⅵ区の中間で発見され、南貝塚南側平坦部が傾斜面に移行するその末端に立地し、ゆるやかな地盤の傾斜が認められる。床面は、表土下約1m、ローム層を約30cmほど掘り込んで、ほぼ水平に踏み固められていた。南北6.1m、東西5.4mの円形プランを呈し、壁は斜めに立ち上り、その裾には周溝がめぐらされ、その中に小さな孔が連続して無数に穿たれていた。中央部に直径約70cmの炉址があり、その炉址と周溝との間に、主柱穴と思われるものがほぼ等間隔（120～200cm）に8本～9本掘り込まれている。

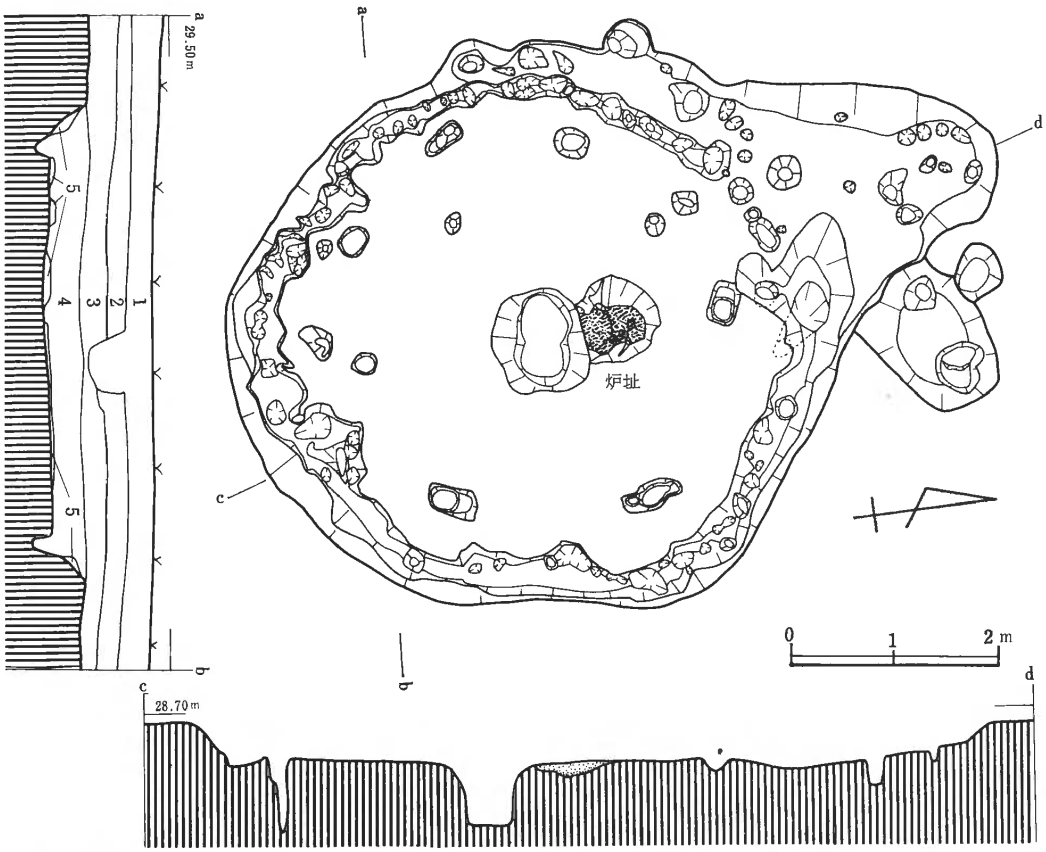
なお、この住居址の北西端に半島状の突出部があり、その床面が皿状に浅く凹んでいる。しかも住居址の主柱穴も、その突出部の方向の柱穴2口だけがわずか1mの間隔に狭められている。これを住居の入口と考えるよりは、むしろ入口とは反対側にあって、貯蔵などの機能を伴った「柄鏡形住居址」の可能性も考えられる。しかし床面には、8～9本の主柱穴のほかに、その内側に3本の細い柱穴の列があり、また、周構の外側にも一部柱穴列があるので、2つ以上の住居址が重複した可能性も考えられる。したがって、この北西端の突出部も、別の遺構が重複したのかも知れない。

さらに、住居址床面のほぼ中央部において、直径約2m、厚さ約30cmほどの貝層堆積があり、その下に、住居址の覆土を切り、炉址の1部を切って掘り込まれた土壙墓（P—12土壙墓、後述）が発見されている。

ところで、この住居址の覆土中から出土した遺物は、土器片では加曽利式が主体を占め、ほかに阿玉台式や加曽利B式がわずかに含まれていた。しかし、床面直上では加曽利EⅡ式の土器が主体を占めていたので、この住居址も同時期に属するものと判定した。その他、覆土中から石皿2、浮子2、石鏃2、軽石1、磨製石斧1、土錘17、円盤状土製品5点などが出土している。



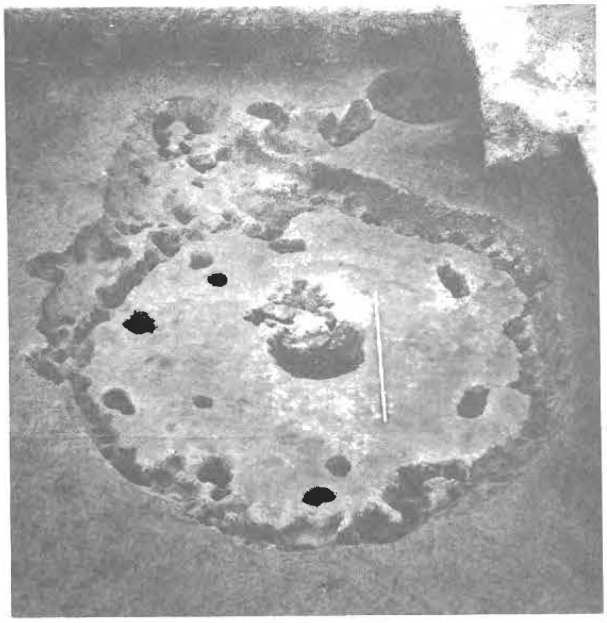
第2図　南側平坦部P—12土壙墓より発見された埋葬人骨　縄文中期（加曽利EⅡ式期）



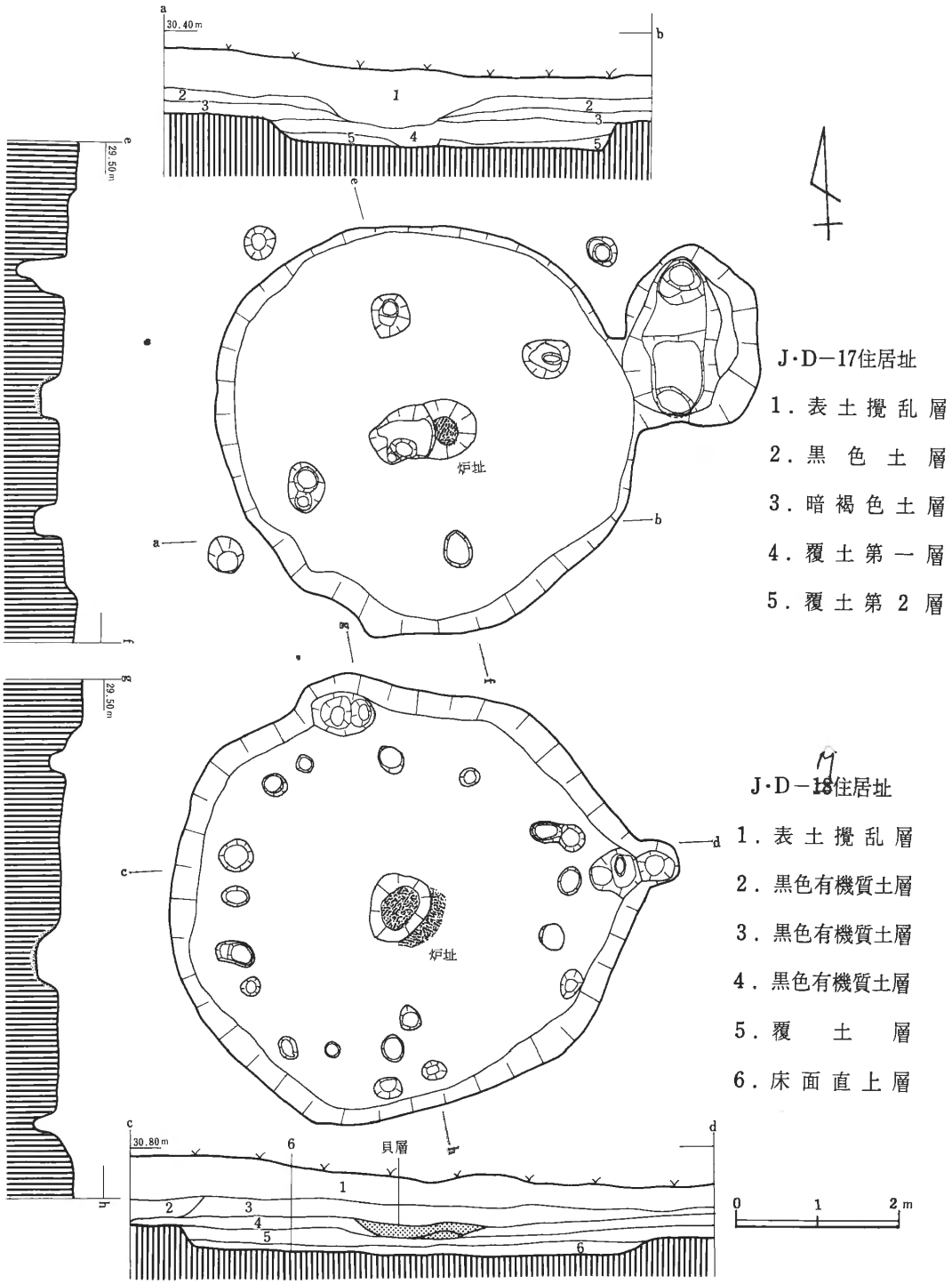
第4図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のJ・D－16住居址
縄文中期（加曽利EⅡ式期）

1．表土攪乱層　3．暗褐色土層　5．明褐色土層
2．黒色土層　4．硬質土層　6．茶褐色土層

第3図　南平坦部P－12土壙墓より発見された埋葬人骨　（南方より）



第5図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のJ・D－16住居址（南方より）



第6図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のJ・D－17(上)およびJ・D－19住居址(下)
縄文中期（加曽利EⅢ式期および加曽利EⅡ式期）

第１表　加曽利南貝塚南側平坦部第４次発掘調査発見の住居址

No.	形態	規模 長径・短径	柱穴	周溝	炉址 長×短	所属時期（土器型式）	伴出遺物	共伴遺構
J・D－16	不整円形	m 7.8×5.5	８口〜９口	全周	80×70	縄文中期 加曽利ＥII	石皿１、浮子２、石鏃２ 磨製石斧１、土錘１、円形土製品３点	Ｐ－12土壙墓と重複
J・D－17	円形	5.2×5.1	４口	なし	70×65	縄文中期 加曽利ＥIII	土錘１、土偶脚部１点	外部に柱穴３口あり
J・D－18	楕円形	7.4×6.1	４口〜６口	ピット列	90×60	縄文後期 堀之内Ｉ	石皿１、浮子１、石器片 土錘20、円形土製品２、有孔円盤１点	貝層を伴う
J・D－19	不整円形	6.3×5.4	９口	壁柱列	80×70	縄文中期 加曽利ＥII	浮子４、すり石１、打製石斧１、くぼみ石１、土錘７、円形土製品２点	貝層を伴う

J・D—No.17住居址（第６・７図）

この住居址は、No.16住居址の西方約20ｍの位置で発見され、地表下約90cm、ローム層を約20cmほど掘り込んで、東西5.2ｍ、南北5.2ｍの円形プランの床面が設けられている。その中央に直径約70cmの炉址があり、それを取り囲んで４口の主柱穴があるが、周溝は認められない。このうち３口の主柱に、それぞれ壁の外側に対応する住居址外のピットが発見され、これらのピットが主柱穴の支柱など屋根組み構造のなんらかの役割を果していたことは明らかである。

床上の覆土から、加曽利Ｅ式の土器片が多数出土している。その中に、加曽利ＥIII式の復元可能土器も発見されている。また炉址の周辺から、加曽利ＥII〜ＥIII式の土器片と土偶の脚部が発見されている。土偶は加曽利Ｂ式期のものであるが、この住居址の時期は加曽利ＥIII式期に属するものと判定した。

なお、この住居址の東端に、その壁を切って、長径2.2ｍ、短径1.8ｍのピット（Ｐ—19小竪穴）があり、また炉址の一部を切って掘り込まれたピットがあるが、住居の廃棄後のものと思われる。

第７図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見された J・D—17（下）およびJ・D—19住居址（上）

Ｊ・Ｄ―No.18住居址（第８・９図）

今回の調査区では最西端、加曽利南貝塚の貝層部にもっとも接近した場所から発見された。表土下約1.2m、ローム層を約30cmほど掘り込んでほぼ水平な床面が設けられ、長径7.4m、短径6.1mの楕円形を呈する。この中央西寄りには、直径約60cmの炉址があり、それを取り囲むように４口ないし６口の主柱穴が乱脈に配置されている。床面上には、ほかにも小ピットが散在するが、いずれも柱穴とは認められない。壁に接して、直径30～10cm、深さ50～20cmの小ピットが27口ほど不等間隔に巡っているが、周溝は認められない。この小ピットが壁の崩壊を止める壁柱穴であろう。

この住居址の南西端には、長径約５m、短径約３mの長円形を呈する竪穴状遺構が接合しており、その中央には直径約1.2m、深さ60cmの小竪穴があり、その中にさらに直径約50cm、深さ約40cmのピットが掘り込まれている。そして、この小竪穴を取囲むように、径約2.2m の円を描きながら10口以上の小ピットが巡っている。おそらく、貯蔵用竪穴であろうが、明らかに床面を切っているので、住居址の付属施設ではないと思われる。

なお、この住居址の南西端においては、さらに２つの竪穴遺構が重複している可能性があるが、それぞれのプランに伴出する遺物は堀之内Ｉ式期に属するものであった。そして、遺構同志の切り合いから、それらのうちこの住居址がもっとも古いことがわかるが、その時期はやはり堀之内Ｉ式期に属するものと判定された。

覆土中よりの出土遺物は、ほかの住居址に比べてきわめて量が少なく、土器片のほか、石皿、土錘が出土し、床面直上からは小量の土器片とチャート片が検出されたにすぎない。土器片はいずれも堀之内Ｉ式であった。

また、覆土内に４つの貝ブロックが認められたが、その貝ブロックはいずれもキサゴを主体とし、ハマグリ、アサリ、アカニシ、ツメタガイ、シオフキなどが含まれていた。この貝ブロックからは加曽利ＢⅡ式の土器片などが伴出しているので、住居址より新しい所産であることは明らかである。

Ｊ・Ｄ―No.19住居址（第６・７図）

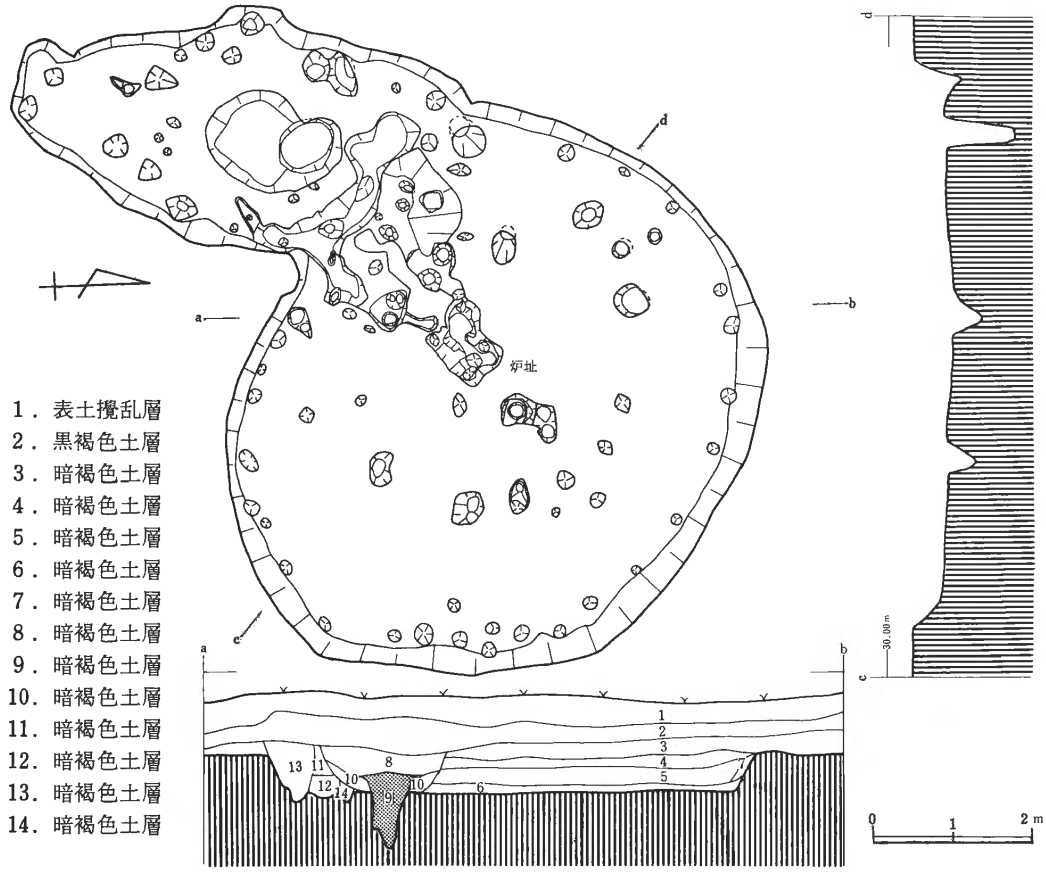
No.17住居址の南側に隣接して発見され、床面は表土下約１m、ローム層を15cmばかり掘り込んで設けられ、長軸6.3m、短軸5.4mの不整円形を呈する。そのほぼ中央に、直径約70cmの炉址があり、それを中心に半径約２mの円を描くように合計15口の柱穴が並んでいる。このうち13口が、２つづつ接近していることから、柱の建て替えや補修のための支柱と考えると、ほぼ等間隔に９口の配置となる。なお、壁はゆるやかに傾斜しながら立ち上がり、その裾に周溝は認められない。この壁の北端および東端に、直径60～80cm、深さ約30cmのピットが伴っているが、用途は不明である。

覆土中から出土した土器片は、加曽利Ｅ式が主体を占め、床面直上から加曽利ＥⅡ式の深鉢形土器が出土しているので、この住居址も同時期に属していたと判定した。そのほかに、軽石製の浮子４、土錘７、有孔円盤１、円盤状土製品１、丹塗土器片１、打製石斧１、くぼみ石１、すり石１などが出土している。

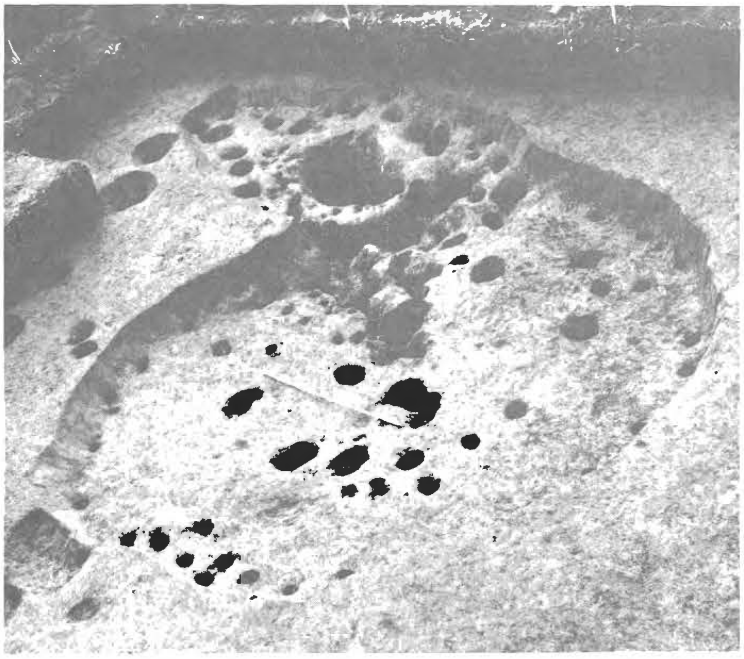
以上のように、今回の発掘調査で確認された住居址は、わずか４基にすぎなかったが、これらの存在する地点は、加曽利南貝塚の貝層部にもっとも接近した位置にあることと、昭和46年度における第３次発掘調査区で発見された住居址に連らなり、同一集落内に含まれることに留意しなければならない。

まず、縄文中期の住居址群は、調査区の東端部から３基発見されているが、これは、昭和46年度の第３次発掘調査区において発見された10基にのぼる中期の住居址群と関連するものである。すなわち、この南貝塚の貝層部から東南方向に約 100mをへだてた平坦部に、あるまとまりをもって縄文中期の集落が展開していることが確認されたわけで、しかも、それは一時的な現象ではなく、阿玉台式期から、加曽利ＥⅡ～ＥⅢ式期にかけて、断続的に存続しているのである。

また、調査区の西端から堀之内Ｉ式期の住居址が１基だけ発見されているが、これは南貝塚の貝層部にもっとも接近しているとはいえ、明らかに馬蹄形貝塚の外側に位置している。しかも、同じ後期に属するとはいえ、昭和46年度第２次発掘調査で発見された東側傾斜面から発見された住居址２基とも、その所属時期が異なる。これによって、後期の集落は、中期の集落とは違って、それぞれの住居址がかなり広範囲にわたって点々と散在していた可能性が判明したわけである。



第８図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のＪ・Ｄ－18住居址　縄文後期（堀之内Ｉ式期）



第９図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のＪ・Ｄ－18住居址（東方より）

2．小 竪 穴

この調査区においては、合計31基の小竪穴が発見されており、そのうちの24基が住居址の周辺から発見され、残る７基が住居址から20～30ｍ離れた位置から３～４基づつ集合して発見されている。これらの小竪穴が、すべて同一の機能をもっていたとは到底考えられないが、直径0.5～３ｍ前後、深さ30cm以上で、その底面がほぼ平坦になっているものを、ここでは小竪穴として一括することにした。それらのうち留意すべきものについて、2、3例示して、その概略を述べておく。

Ｐ―No.12土壙墓（第２・３図）

これは、さきに述べたNo.16住居址と重復して発見されたもので、その住居址が廃棄された後に、ほぼ中央部に深さ約60cmほど掘り込まれている。長軸１ｍ、短軸80cmの繭（まゆ）形に近い楕円形を呈している。住居址の炉址を切って掘り込まれたため、この覆土中には多量の焼土ブロックが混入していた。その土質は均一ではなく、いったん掘り上げられた土がふたたび埋めもどされたことを明瞭に物語っていた。この土壙の基底は、長軸90cm、短軸40cmほどの狭小さで、人体を極端に折り曲げてやっと１体が埋葬できる程度の広さであった。

この土壙の上には、それが埋めもどされた後に投入された貝層が、直径約２ｍ、厚さ約30cmほど堆積していた。そのため、土壙中に埋葬された人骨が比較的よく保存されていた。この人骨は、頭部をほぼ東に向け、西に向けた下肢骨は膝の部分で極端に折り曲げられ、背中と腰の部分を土壙の底面に接着させた仰臥屈葬の姿態をとっていた。頭部は垂直にもたげられていたが、顔面の方向が左向きに極度に曲げられ、その頭頂部には加曽利ＥⅡ式の深鉢形土器がかぶせられていた。しかし、その底部は欠損しており、胴部から口縁部にかけての部分だけが残っていた。いわゆる甕被葬であるが、埋葬後なんらかの作用によって攪乱されたらしく、そのとき甕の底部を失い、人骨の顔面が反転したものと思われる。

この頭骨の縫合や乳様突起、骨盤、恥骨、あるいは四肢骨の骨端部など肝腎な部分が、ほとんど腐蝕のため消失していたため、この人骨の年令や性別、身長などは判定できなかった。詳細については、後日の鑑定に期待したい。

Ｐ―No.13小竪穴（第10・13図）

これは、No.18住居址の周辺から発見された10基の小竪穴群の中の１基で、表土下約1.2ｍ、ローム層を約　cmほど掘り込んで、ほぼ平坦な床面が設けられている。口縁部のプランは、長軸1.1ｍ、短軸１ｍのほぼ円形を呈するが、その基底部では直径約1.3ｍの円形をなし、深さは約1.2ｍをはかる。その断面形は、口縁より底面が下張れになった、いわゆる「フラスコ型」である。

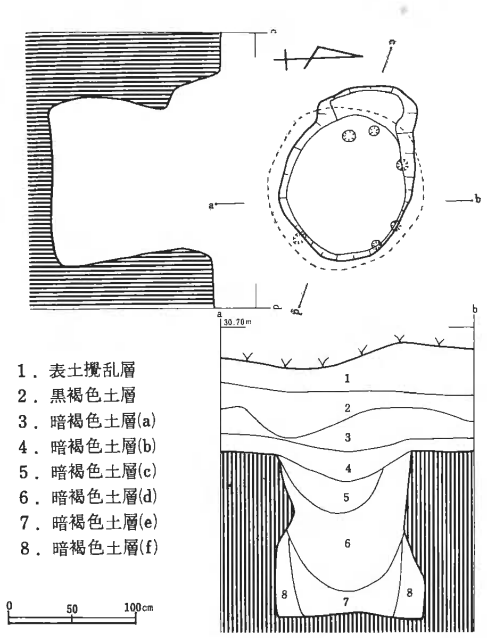
覆土中からの遺物の出土は比較的少なく、少量の土器片、黒曜石片、自然石片が含まれていたにすぎない。この覆土の上層から、加曽利Ｅ式の土器が一片出土しているが、それ以外の下層から出土した器片は、いずれも阿玉台式であった。したがって、この小竪穴も阿玉台式期に属するものと判定した。

この小竪穴は、住居址に直接伴うものではないが、南貝塚の貝層部の南東端において阿玉台式期の住居址（22号・23号）が発見されているので、居住に伴うものであり、その形態や構造からも、食糧などを貯えた一種の貯蔵用施設であったと推定されよう。

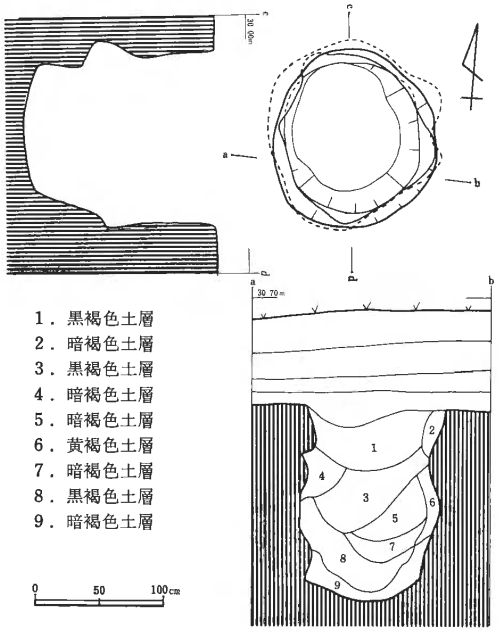
Ｐ―No.15小竪穴（第11・14図）

調査区の西端部に集中する小竪穴群の中の１基で、Ｐ―14小竪穴の西側に隣接して発見された。表土下1.3ｍ、ローム層を約1.2ｍほど掘り込んで設置され、その口縁のプランは長径1.5ｍ、短径1.3ｍの不整円形を呈し、基底はやや舟底形に凹んでいるが、長径１ｍ、短径80cmの楕円形を呈する。断面形は壁の中腹部が狭められ、底部がやや脹らんでおり、いわゆる「フラスコ型」をなしている。

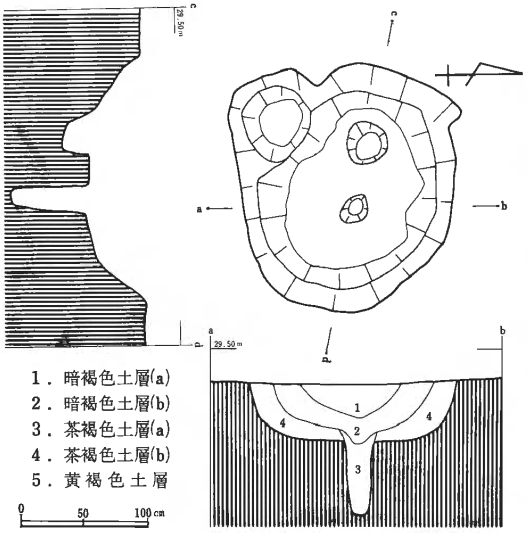
この覆土中からは、阿玉台式の土器が出土しているが、その中に加曽利Ｅ式の土器片もかなり混入しているので、この小竪穴は阿玉台式～加曽利Ｅ式期に属するものと判定せざるをえない。そのほか、黒曜石の破片が出土しているが、生活用具や生産用具などの伴出は認められなかった。加曽利Ｅ式の初期においては、この種の小竪穴から埋葬人骨が発見される例もあるが、その多くは当初から墓壙として掘り込まれたものではなく、廃棄された貯蔵穴を利用している。こうした傾向からみても、この小竪穴は、もともと貯蔵穴として設けられたものと推定される。



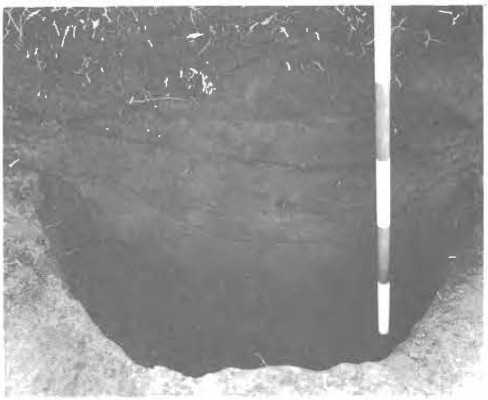
第10図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のＰ－13小竪穴　縄文中期（加曽利ＥⅡ式期）



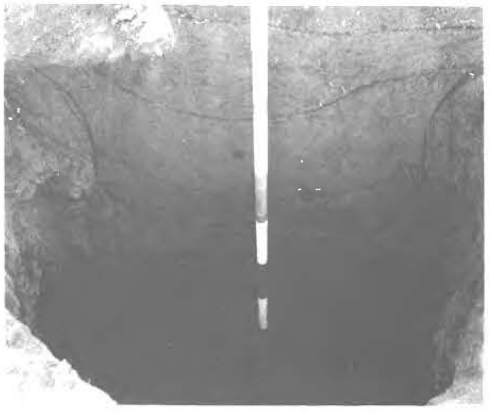
第11図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のＰ－15小竪穴　縄文中期（加曽利ＥⅡ式期）



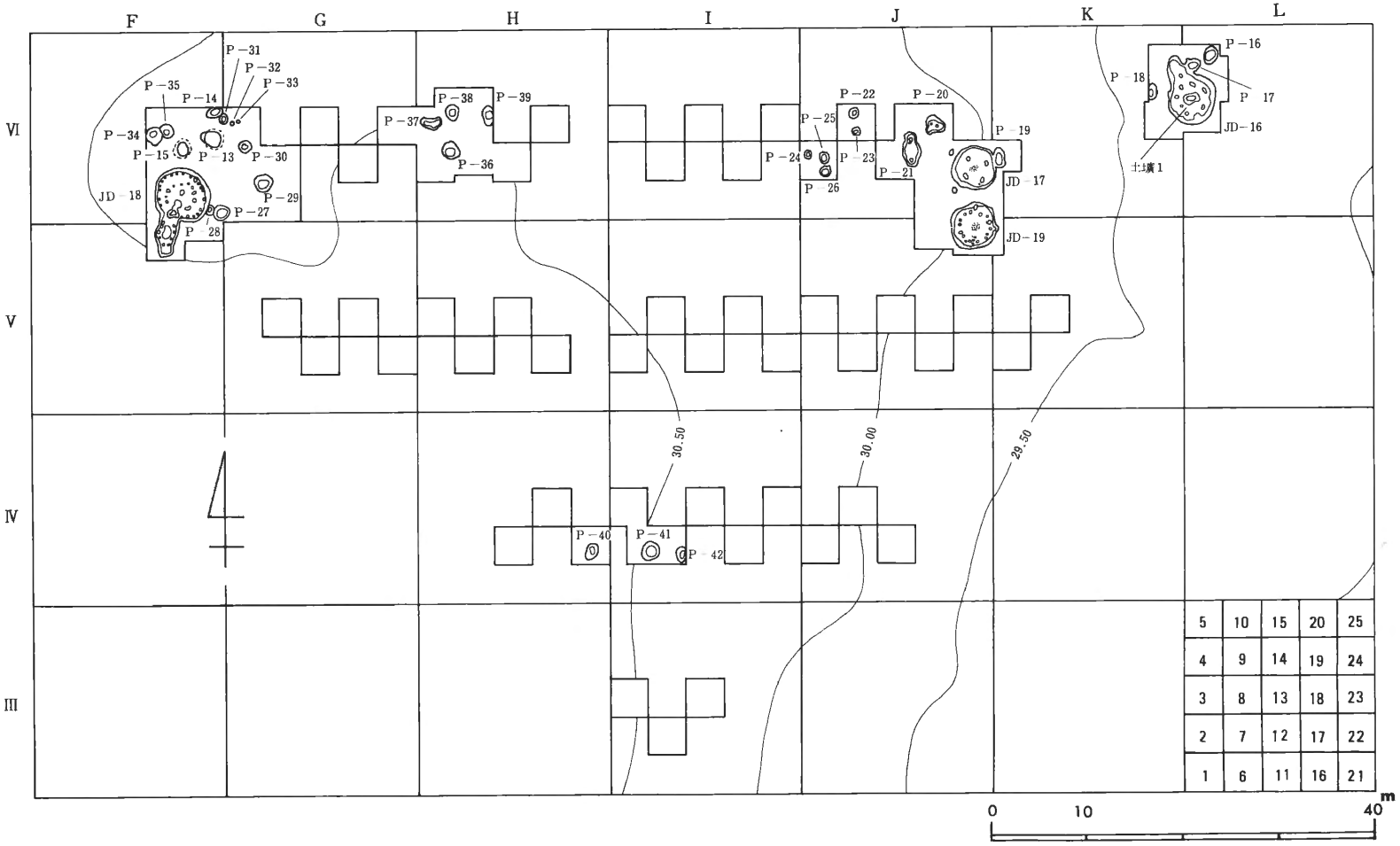
第12図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のＰ－20小竪穴　縄文中期（時期不明）



第13図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のＰ－13小竪穴　（東方より）



第14図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のＰ－15小竪穴（東方より）



第15図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見された遺構の分布図（昭和47年度・第４次発掘調査分）

第2表　加曽利南貝塚南側平坦部より発見された小竪穴（昭和47年度・第4次発掘調査分）

No.	形態	規模 長径×短径m	柱穴	所属時期（土器型式）	伴出・遺物・遺構	備考
P—12	円形	1.0×0.9	なし	加曽利EII	埋葬人骨、褒被土器（EII）	土壙墓
P—13	円形 フラスコ	1.5×1.2	なし	加曽利EII	土器片（阿玉、加EII・III）底部に小ピット	貯蔵穴
P—14	円形 フラスコ	1.1×0.9	なし	阿玉台	土器片（阿玉・加EII）	貯蔵穴
P—15	円形 フラスコ	1.5×1.35	なし	阿玉台	土錘1、円形土製品1、丹塗り土器片1	貯蔵穴
P—16	円形	1.6×1.4	なし	加曽利EIII	底部に小ピットあり	
P—17	楕円形	1.6×1.0	なし	加曽利EIII	底部に小ピットあり	
P—18	楕円形	1.5×1.1	なし	加曽利EII	軽石製浮子1、円形土製品1	
P—19	楕円形	2.3×1.6	なし	不明	なし	
P—20	楕円形	2.0×1.8	2口	不明	なし、底部平坦	
P—21	楕円形	3.3×1.95	2口	不明	なし、深い	
P—22	円形	0.5×0.45	なし	不明	なし、深い	
P—23	円形	0.5×0.45	なし	不明	なし、深い	
P—24	円形	0.4×0.35	なし	不明	なし	
P—25	円形	1.2×1.1	なし	阿玉台	底部に小ピットあり	
P—26	円形	1.2×1.0	なし	不明	石器片1，土器片なし	
P—27	円形	1.7×1.6	なし	不明	なし、底部に小ピットあり	
P—28	楕円形	1.3×1.0	なし	不明	なし、J・D—19と重複	
P—29	円形	2.1×1.9	1口	加曽利EIII	土器片（阿玉4、加EIII4）	
P—30	円形	0.9×0.9	なし	加曽利EIII	土器片（加EIII5）	
P—31	円形	0.7×0.6	なし	加曽利EIII	土錘3、土器片（加EIII7）	
P—32	円形	0.4×0.4	なし	不明	なし	
P—33	円形	0.4×0.3	なし	不明	なし	
P—34	円形	1.2×1.2	なし	加曽利EIII	土器片（加EIII2）	
P—35	円形	1.2×1.0	なし	阿玉台	土器片（阿玉1）	
P—36	円形	1.5×1.3	なし	不明	なし	
P—37	楕円形	2.5×1.2	なし	加曽利EII	土器片（EII6）、小ピット	
P—38	楕円形	1.3×1.1	なし	不明	なし、底部に小ピットあり	
P—39	楕円形	1.6×1.1	なし	不明	なし、底部に小ピットあり	
P—40	円形	1.1×1.0	なし	不明	なし、底部に小ピットあり	
P—41	円形	1.9×1.9	なし	加曽利EI	土器片（加EI1）	
P—42	円形	1.1×1.0	なし	加曽利EII	土器片（加EII6）	

以上のように、今回の発掘調査によっても、この南貝塚の南側平坦部においては、住居址の周辺に小竪穴が密集する傾向がみられた。従来、この種の遺構の本格的な研究が乏しいが、集落の関連遺構として、今後注目すべきであろう。

（後藤　和民）

Ⅵ　おもな出土遺物

発堀調査の行なわれた南貝塚南側の台地上平坦部分からは、縄文中期・加曽利ＥⅡ式期～後期・堀之内Ⅰ式期の竪穴住居址４基と土坑、ピット等計20基が発見され、文化層も中期～後期のものが主体を占めていることが確認された。このため発見された遺物類もこの時期のものが、圧倒的に多い。調査対象区域は、前述の如く台地上平坦部のため、内部の層状は調査区域内の東端から西端までほぼ共通している。基本的には　1.表土層、2.黒褐色土層、3.暗褐色土層、4.褐色土層　5.ソフトローム層（地山）という層序を呈するが、このうち縄文時代の遺物包含層は２層と３層であり、とくに２層から３層上部にかけて遺物が集中していた。４層は、５層への漸移層でほとんど遺物は含まない。また、表土層中より土師器の小破片が少量含まれていたが、文化層は未確認である。

発掘された遺物類の中で数量的に一番多いのは、やはり縄文式土器の破片である。このうち１ヶ所にまとまって出土したものは、すべて一括土器としてとりあげた。この件数は20に達したが、完形品はなく、復原可能土器11点を数えるだけである。発掘面積の割りには出土した土器の数は少ない。第16図に示した如く、復原可能土器11点のうち時期的に多いのは、加曽利ＢⅠ式（４点）、堀之内Ⅰ式（３点）、加曽利Ｅ式（２点）等である。遺構との伴出関係では、明確に床面直上出土のものはほとんどなく、加曽利ＢⅠ式の３点（第16図7 9.10）と加曽利Ｅ式の２点（第16図1.2)は、住居址の覆土中およびその土層から出土し、堀之内Ⅰ式はいずれも遺構とは離れた第２層中より出土している。

石器および石製品は、106点出土している。このうち数的に多いのは、石鏃とすり石で各20点ずつ出土。次いで、浮子を含む軽石製品や石皿等が数の上では目立っているが、これらはほとんど小破片である。石製品として、ヒスイ製の垂飾（半欠）が１点のみ出土。これらの他に、チャートや黒曜石の石片ないし石砕が50点近く確認されている。

土製品は、今回発堀された遺物の中で最も多く265点を数える。この内訳は、土器片錘が172点と全体の65％を占め、次いで、紐かけのない土製円盤が79点あり、実に両者で94％を超してしまう。これら土器片の時期は先年度の調査同様、中期の加曽利Ｅ式が圧倒的に多い。

その他の土製品は、有孔土製円盤（土器片利用）11点と山形土偶と思われる脚部１点および臼形耳栓1点のみである。今年度の調査によって発見された土製品は、土器片利用以外のものは土偶脚部と耳栓のただ２点だけということになる。

その他に特殊なものとして、丹塗を施した土器片（中期・加曽利Ｅ式主体）が14点発見されている。

本年度の発掘調査による出土遺物は、全体に零細である。とくに住居址や遺構の数が少なかったためか、まとまった出土例が少なく、中でも遺構面直上からの出土は稀であった。

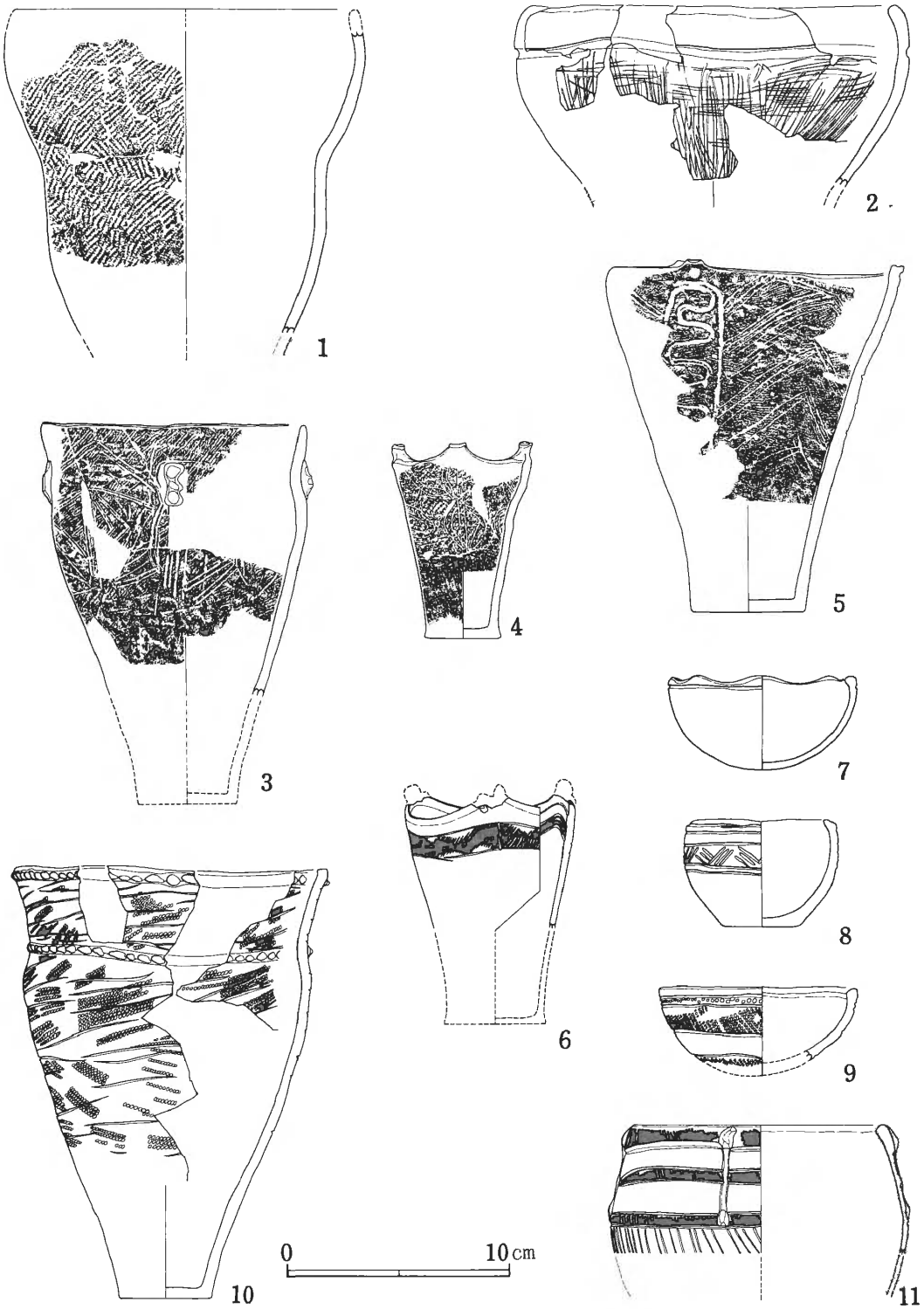
今回の調査では、ここにあげた人工遺物の他に、いわゆる自然遺物も若干出土している。たとえば、J・D―16号、19号の住居址の中央部分には、小規模ながらいくつかの貝ブロックが残存していた。しかし、この貝層部の分析には未だ充分な時間を要するため、これらの報告は後日の本報告にゆずりたい。

土　器（第16図1～11）

１は、J・D―２号住居址の覆土第１層中より出土。口縁部と胴下部以下を欠損するが、全体に胴部が膨らんだキャリパー形の深鉢である。文様は、器面のほぼ全面にＬＲ単節縄文を方向を変えて羽状に施している。形態からみて、加曽利Ｅ式終末期のものであろう。

２は、J・D―１号住居址の覆土第１層中より出土した。浅鉢形を呈するが、胴下半部を欠損している。口縁部に巾４cmほどの無文帯があり、口縁をめぐる太く浅い沈線の下には、口辺から胴下部へ向って縦若しくは斜めにひかれた細線によって器面が埋められている。この細線はかなり粗雑に施されており、口辺部では一部に横方向に擦痕状に施されている。加曽利ＥⅡ式。

３・４・５は、堀之内Ⅰ式の深鉢形土器である。３は、ⅠⅤ区―22Ｇの第２層（暗褐色土層）上部出土。４はＨⅥ区―12Ｇの第２層上部、５はＨⅥ区―２Ｇの第２層上部から出土した。いずれも、ＬＲ節単縄文を地文とし、これに半裁竹管（３・４）若しくは太い沈線（５）によって、三角文や菱形文などの幾何学的文様や倒卵文、懸垂文など



第16図　土器実測図　1．加曽利EⅢ式、2．加曽利EⅡ式、3～5．堀之内Ⅰ式、6～8・10．加曽利BⅠ式
9．加曽利BⅢ式、11．安行Ⅰ式

を描き加えている。4・5は口縁に三単位の小突起があり、前述の文様は、これら突起下の縦方向の文様帯を中心に描かれている。3は、口縁と胴下部を欠損しているが頸部にキザミ目を有する突起が4ヶ所に付され、この突起下の文様帯によって胴部文様は4面に区画されている。

6・10は、加曽利BⅠ式の深鉢形土器である。6は、HⅥ区—18G、第2層上部出土。10は、J・D—4号住居址覆土第1層中の出土である。6はいわゆる精製深鉢形、10は精製の深鉢形土器である。10は、口縁のみならず頸部にも指頭圧痕を有する紐線がめぐっているが、加曽利BⅡ～Ⅲ式に比べて紐線は細く、連続する指頭圧痕の間隔も広い。

7・8は、加曽利BⅠ式の浅鉢および碗形土器で、7はFⅥ区—22Gの第2層下部より出土。8は、JⅥ区—17Gの表土層下部から発見された。

9は、FⅥ区—18G・22Gから出土した土器片の接合例である。両グリッドは互いに隣接してはいるが、平坦地でのこのような出土例は珍らしい。本土器は丸底と思われ、加曽利B式後半期に属する。

11は、FⅥ区—17Gの第2層（暗褐色土層）から出土。破片復原であるが、図示した中では唯一の安行系土器である。

石器および石製品（第17図1～13）

石器105点、石製品1点、その他に石片（石砕）47点、加熱を受けた自然石4点が出土している。

これらの石質および所属時期についつは後の本報告にて詳述したい。

石器および石製品の種別と点数は次のとおり。

1.	磨　石	20点
2.	たたき石	2
3.	石　皿	13
4.	くぼみ石	6
5.	石　鏃	20
6.	磨製石斧	7
7.	打製石斧	6
8.	浮子(軽石)	22
9.	石　槍	1
10.	多孔石	1
11.	砥　石	1
12.	石製垂飾	1
13.	不　明	6
	計	106点

これらを生活用石器（磨石、たたき石、石皿、くぼみ石）と他の生産用石器に分類してみると両者の比率は、前者が39%、後者が55%となる。次にそのいくつかを紹介しよう。

第17図1～5は石鏃である。ここに図示したものは19点出土したもののうち比較的形の整ったものである。遺構には伴出せず、単独の出土である。

2・5は第2層（黒褐色土層）より、1.3.4は第3層（暗褐色土層）中から出土。石質は、2のみがチャート製、他は黒曜石製である。5は、大型品で鏃より槍先に近い形状を呈している。

6は、HⅥ区—7Gの第2層上面より出土。石質は砂岩製で、昨年度の調査によってJ・D—8号住居址の床面から発掘された石槍(「貝塚博物館紀要6」　第40図7）と石質のみならず形態も酷似している。

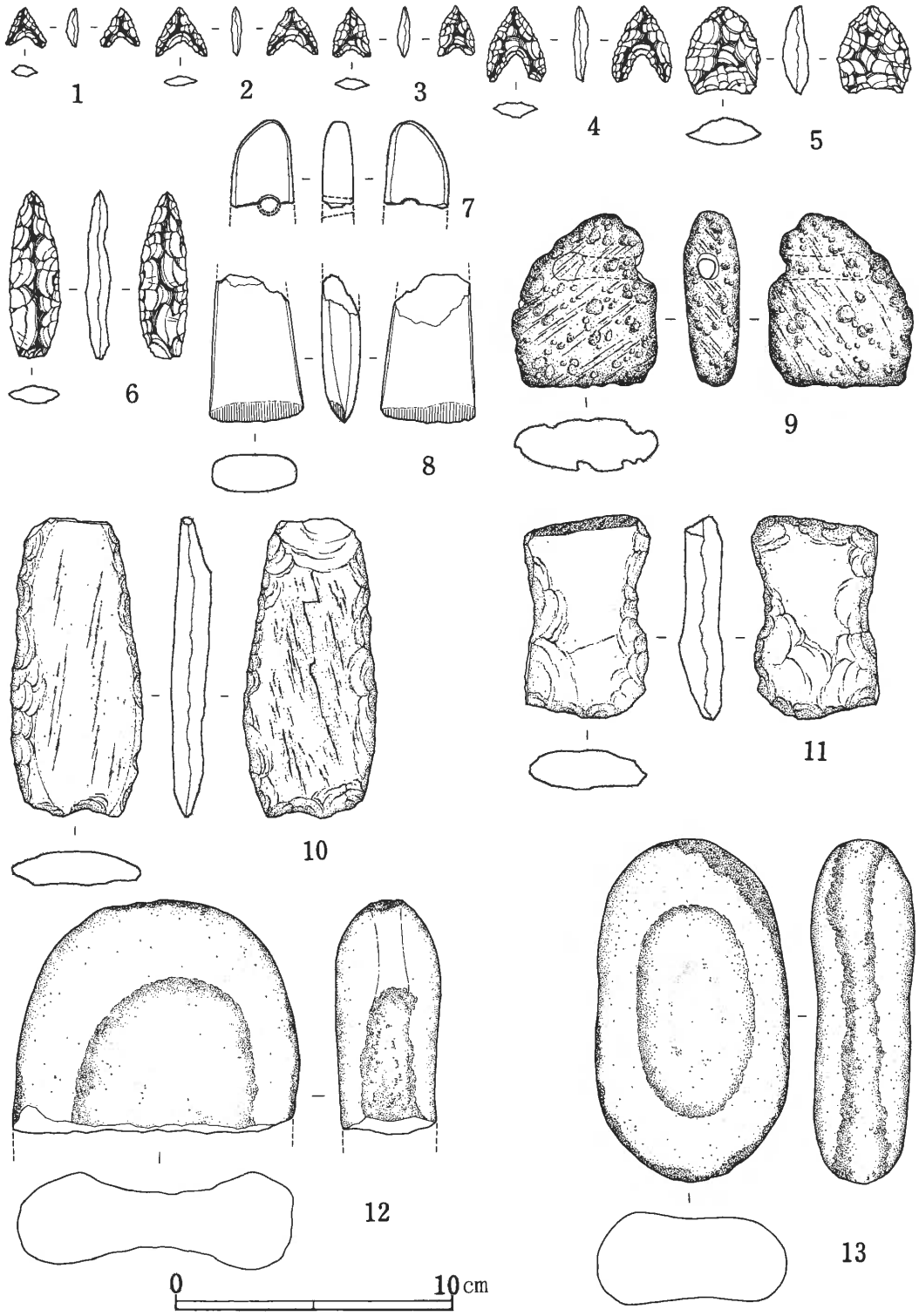
7は、今回出土品の中では唯一の硬玉製垂飾である。LⅥ区—4Gの第2層上部より出土。硬玉製品としては中型の部類に属するが、惜しいことに中央部の穿孔部から割れてしまっている。

8は、LⅥ区—13Gの第3層（茶褐色土層）より出土。蛇紋岩製の磨製石斧である。頭部は欠損しているが、つくりは良い。刃部に両面とも使用痕らしい擦痕がある。

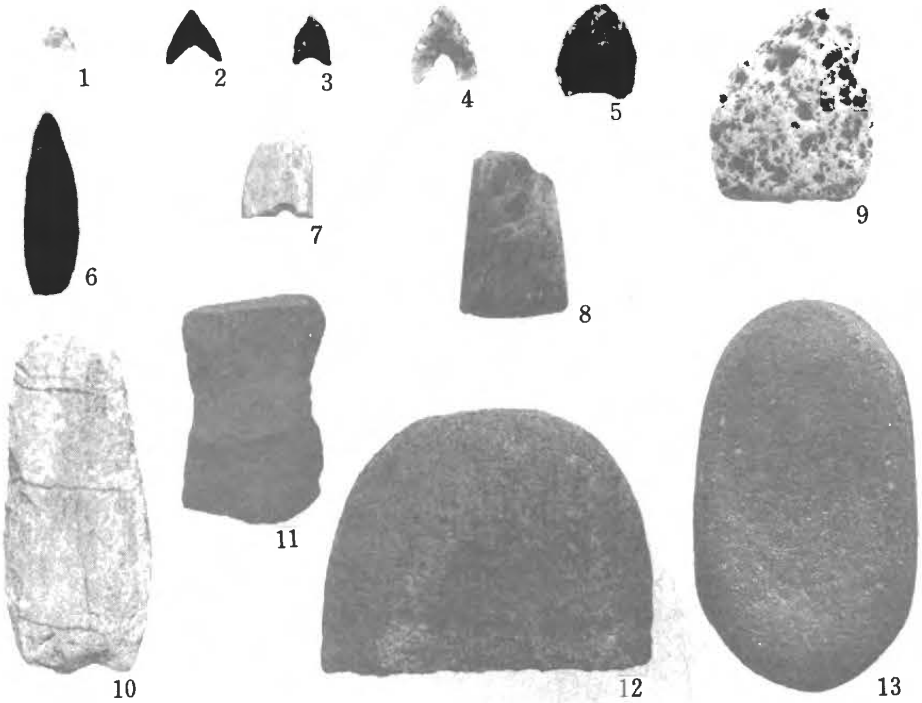
9は、LⅥ区—3GにあるJ・D—16号住居址内の土壙—1覆土中より出土。かなり質の粗い浮岩を利用して偏平板状に仕あげており、偏平な中央部を貫くように穿孔されている。

10. 11は、打製石斧である。10は短冊形、11は分銅形に近い形態を呈するが、つくりは粗い。10はJⅥ—12Gの第2層中、11はJ・D—3号住居址の覆土第1層中から出土した。石質は不明。いずれも刃先は鈍く、「斧」としての機能を有するとは認めがたい。

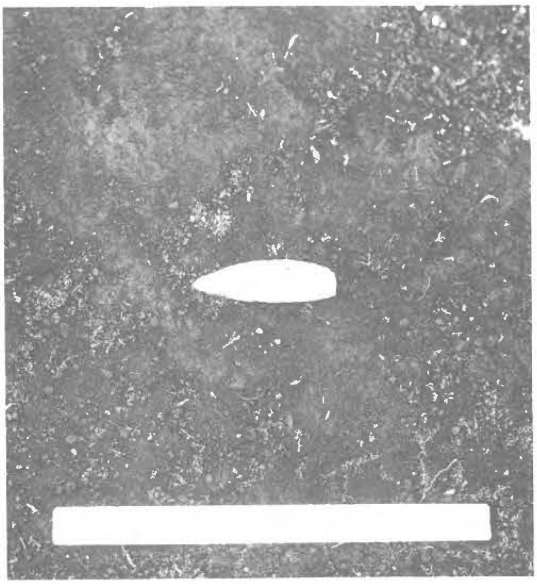
12. 13は、いわゆる、くぼみ石である。12は大型品で、小型の石皿と言ってもよい形状を呈する。12は、JⅤ区—17Gの第2層上部から出土。内面は表・裏ともに深く磨り減っており、この部分が頻繁に使用されたことを物語っている。13は、J・D—3号住居址の覆土第1層中出土である。表・裏のくぼみ部分だけでなく、側面部にも敲打のあとがみられる。



第17図　石器実測図　1～5．石鏃、6．石槍、7．垂飾、8．磨製石斧、9．浮子、10．11．打製石斧、12・13．くぼみ石



第18図　石器　1～5.石鏃　6.石槍　7.垂飾　8.磨製石斧　9.浮子　10.11.打製石斧
12.13.くぼみ石



第19図　石槍の出土状態

土製品（第20図1～21）

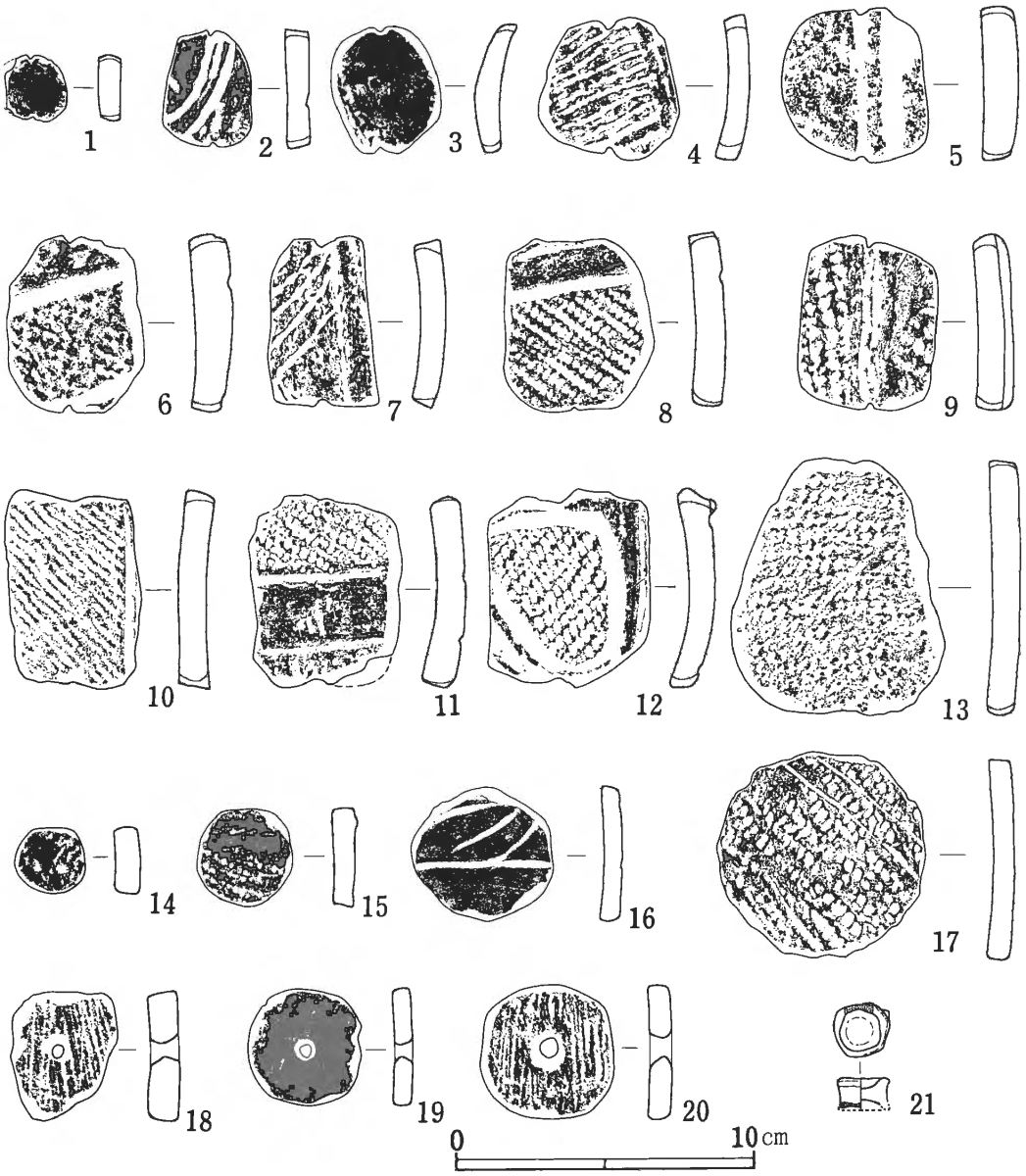
土器片錘 172点、土製円盤79点、有孔土製円盤12点、土偶片1点、耳栓1点が出土している。

第20図1～17は、土製品の主体を占める土器片錘と土製円盤のほんの一部である。これらは昨年度の出土品同様、加曽利E式土器を利用したものが圧到的に多く、土器片錘では紐かけ2ヶ所を有するものが普遍的である。

18～20は、有孔土製円盤である。完形品は、この三点のみ。18はⅠⅥ区―23Gの第2層上部、19はJⅥ区―22Gの第3層より出土。20はJ・D―19号住居址の覆土第1層中から出土した。いずれも中央部の穿孔は両面から行なわれているが、18・19は縁辺を擦って整形し、20は打割によって整形されている。18．20は加曽利E式土器、19は後期土器片を使用している。

21は、JⅥ区―17G第2層出土。臼形の耳栓である。このタイプの耳飾りは、加曽利貝塚東傾斜面の調査では初の出土である。

（庄司　克）



第20図　土製品実測図　1～13．土器片錘、14～17．土製円盤、18～20．有孔土製円盤、21．耳栓

◁第21図　土錘出土状況

お　わ　り　に

以上、加曽利南貝塚南側平坦部における昭和47年度・第4次遺跡限界確認調査の概要を述べたがその結果について、確認された主な事項をここに簡単にまとめておく。

1)、加曽利南貝塚南側平坦部の南側においては縄文中期の阿玉台式期の、北東側においては縄文中期の加曽利E式期の、また北西側においては縄文後期の堀之内式期、加曽利B式期および安行I・II式期の文化層が認められ、それぞれの附近に、同時期の生活面の存在が推定される。

2)、発見された4基の住居址のうち、J・D－16、J・D－17およびJ・D－19住居址の3基は加曽利E式期に属するもので、46年度の調査において発見された加曽利E式期の住居址群の一部を成すものと推定される。また、西端のJ・D－18住居址は堀之内式期に属するもので、南貝塚における縄文後期の住居址群に含まれるものと思れる。

3)、西端より発見されたフラスコ型の貯蔵穴は、昭和39年における南貝塚の緊急発掘論査で発見された。縄文中期の住居址や貯蔵穴群の一部を成すものであると推定される。その他の小竪穴群も、ごく一部のものを除けば、(それさえ、その周辺部の発掘調査をおこなえば、住居址が発見される可能性がある)、その大半が住居址の周辺に密集しており、これは昭和46年度における第3次発掘調査においても同じような傾向がみられたところでもある。

4)、本年度の調査によって、南貝塚の南側平坦部においては、縄文中期および縄文後期の住居址群が重複し、とくに南貝塚の東南部においては縄文中期の集落が展開していることが確認された。これによって、南貝塚の貝層部とその南側平坦部や東側傾斜面との間には、さらに多数の住居址や集落に関連する遺構が多数埋没している可能性が確認され、また、貝層部とその外側の平坦部および傾斜面とは密接な関連があることが立証されたことになる。

以上のように、昭和45・46年度の調査結果を含めて、今回の発掘調査によって、この加曽利貝塚においては、縄文中期から後期にかけての各時期の住居址群は、馬蹄形や環状をなす大型貝塚の貝層部の内側ばかりでなく、その外側の南側平坦部や東側傾斜面にも広く展開しており、しかもそれらが別々の集落ではなく、同一集落に含まれるものであることが明らかとなった。

しかも、その各時期における住居址の偏在的傾向から、各時期の主要な居住地域が、同じ台地上においても時期ごとに移動していることも明白となったのである。

したがって、加曽利貝塚を集落遺跡として捉え、その生成―発展―消滅という歴史的変遷の過程を捉えるためには、加曽利貝塚の周辺部を含めて広範囲な再検討が必要である。その一環として、今後もひき続いて、南貝塚の周辺部はもちろん、北貝塚の周辺をも含め、また南側や東側のみならず、西側の平坦部をも併せて、計画的に「遺跡限界確認調査」を実施してゆかねばならない。

しかも、加曽利貝塚の集落構造を解明し、それを将来、野外博物館として現地に固定し、十分に活用するためには、縄文時代の舟着場（集落の玄関口)、泥炭層遺跡の埋没している可能性のある古山支谷、また、縄文中期・加曽利EIII式期の集落が展開していることが予測されている対岸の滑橋貝塚など、加曽利貝塚周辺地域を保存しなければならない。それにも、その存在意義や内容、そしてその必要範囲を確認するために、やはり「遺跡限界確認調査」が必要となるのである。

（後藤　和民）